

2020

令和2年12月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻328号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあそぼう



さわやか福祉財団

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い!

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ 

「寄付」と「活動」で温かい地域づくりを進める基金です

あなたの気持ちを 助け合いの力に活かしませんか?

地域助け合い基金は、どんな状態になっても、誰もが安心して暮らせるように地域で助け合うための基金です。生活に困りごとを抱えている方々を助ける市民活動者・団体に活動資金を提供し、まずはコロナ禍をみんなの温かい心で乗り越えられるように。そして、その助け合いの力が、平時の生活に戻った後も困った時にはいつでも発揮されるように、自由で、楽しくて、しっかりした地域の助け合い活動を築いていきます。

**ご支援、ご寄付を
どうぞよろしくお願い申し上げます。**

※詳細は、本文19ページをご参照ください。

財団ホームページ内
基金関連ページ



公益財団法人

さわやか福祉財団

さあ、言おう

2020年12月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

国に緊急提言を行いました 清水 肇子

4 介護保険制度改正問題

～何を、なぜ、緊急に要望するのか～

6 新連載 移住 悪くないですよ

寒いけれどあたたかい、枝幸町の応援団長

鷺見 道子さん（北海道枝幸町）

12 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

コロナ禍でも開催中！

「愉快で楽しい多世代交流」のまちなかりビング

東灘こどもカフェ（兵庫県神戸市）

20 **応援ありがとうございます！「地域助け合い基金」助成先のご紹介**

23 **「地域助け合い基金」状況のご報告**

24 **看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…** ～最終回～

「死」を想うきっかけとなった 新型コロナウイルスの襲来 尾崎 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

28 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

34 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

36 NEWS & にゅーす

38 さわやか活動日記（抄）

19「地域助け合い基金」ご寄付のご案内／29『さあ、言おう』8月特別号のご紹介

33「NEXT」動画のご紹介／35今年もさわやかパートナーにお贈りしました

39 2020年度さわやか福祉財団全国交流フォーラムについて

40「地域助け合い基金」助成応募のご案内／41みんなの広場/投稿募集

42 さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 秋山 正子

国に緊急提言を行いました

希望する誰もが助け合いのサービスを受けられるために
ぜひご賛同ください

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

皆さんの周囲に、介護を必要としている方がいらっしゃいますか？ あるいは、今、家族の介護を担っている読者の方はどのくらいいらっしゃるでしょうか？ また、そうした介護を必要としている方は、介護保険による専門的サービスだけで幸せな毎日を過ごすことができるでしょうか？

去る11月2日、さわやか福祉財団は、会長・理事長の連名で、田村憲久厚生労働大臣宛に、**「希望するすべての要介護者」に助け合いによる生活支援（総合事業の補助によるサービス）を」と題した「緊急提言」を提出しました。**

背景は、まず昨年末に遡ります。国の社会保障審議会介護保険部会が「介護保険制度の見直しに関する意見」をまとめ、その中で、現在、総合事業のサービスを利用できる対象者が要支援者等に限定されていることを見直し、要介護者も含めて利用できるように弾力化するという方向が打ち出されました。総合事業とは、介護保険の枠組みの中で、サービスの内容を市町村が独自に考えて実施するもので、特に住民主体の助け合いによるサービスが補助の仕組みに組み込まれています（代表例として、訪問型サービスB・D／通所型サービスB）。

この見直しは、自治体や助け合い活動を行っているNPOの要望があつてのことで、それは、要介護状態になつてもできるだけ地域とつながりながら暮らしたいという、要介護者ご本人の切実な、そして当然の希望を踏まえてのものでした。これを受けて、国は来年4月から対象を要介護者まで広げる手続きをすすめ、各自治体にも説明を行っていました、この秋に方針が一変。10月に出た省令では、利用できる要介護者は、要支援段階からの継続利用者のみとされました。一部に、介護給付抑制や要介護者への保険給付はすしにつながりかねないといった強い反対意見が出たことが背景にあります。さらには、国が省令で出した継続の利用についても、市区町村で運用を控えるべきといった動きまで出てきました。これは大変残念な誤った考え方で看過できない状況であり、当財団として、緊急提言を行うこととしました。

対象の拡大は、新しい選択肢を加えるだけで、ご本人の尊厳ある生活を支えるものに他ならず、サービスの切り捨ての布石にはなり得ません。専門職人材の圧倒的な不足や認知症者の急増が現実となり、介護殺人といった痛ましい事件まで起きる中で、介護が必要な方が総合事業の助け合いサービスを利用できる仕組みは、ご本人に安心と尊厳（いきがい）をもたらすものです。それが地域の活性化につながります。いかに助け合いを身近に提供していける仕組みを整えるかは、ご本人にとっても支える家族にとっても、そして地域にとっても喫緊の課題です。

私たちは、全国の皆さんと一貫して、誰もがどのような状態になつても安心して心豊かに暮らせる地域をつくる活動を強力に展開してきました。緊急提言は、全自治体にも送付しています。助け合いの活動定着、仕組みづくりには時間がかかりますが、皆で逃げずに向き合い、豊かな高齢社会を育んでいきましょう。ぜひ皆様のご理解とご賛同をお願いいたします。

提言の内容、賛同申込については、次のページ及び当財団のホームページをご覧ください。

介護保険制度改革問題

～何を、なぜ、緊急に要望するのか～

公益財団法人 さわやか福祉財団

会 長 堀田 力

理事長 清水 肇子

【これまでの制度】

これまで、介護が必要な要介護者には、介護保険制度により、必要な介護が提供されてきました（左ページ参考図① 介護給付）。

【改正のポイント】

厚労省は、要支援の段階から「助け合い（住民主体のサービス）」を受けている要介護者が希望すれば、介護給付のほかに、引き続き助け合いも受けられるようにするため、省令を改正し、来年4月から助け合い活動を主催する団体に補助できるようにしました（参考図④ 助け合いを加える改正）。

【改正の理由】

かねてから、全国の高齢者より「要介護状態になってもご近所の助け合いで仲間と話したり、自分のしたいことを一緒にしたりして暮らしたい」との希望が出ていたもので、それに応える改正です。

【反対の動きとその理由】

この改正に対し、「この改正は、軽度者（要介護1、2の方）に対する介護給付を止めるための布石だ」とか、「要介護者には専門家による介護が必要だ（助け合いでやるのは不当だ）」などの理由で、反対の声が上がりました。

【問題の緊急性】

一部の反対者は、これから開催される地方議会等でこの問題を取り上げ、市町村長がこの改正に基づく措置を採らないよう働きかけると伝えられるため、私たちは緊急にこの改正の趣旨を正しく受け止めていただきたく、同封の緊急提言を出しました。

【反対者の理由は誤解】

今回の改正は、これまでの介護給付のほかに助け合いも受けられるという改正であって、助け合いでもってこれまでの介護給付に代えるというものではありません。また、軽度者に限らず、すべての「希望する要介護者」が受けられる改正です。だから、いわゆる「軽度者切り捨て」の布石にはなり得ません（軽度者問題は、別途総合の見地から議論すべきです）。

また、専門職による介護給付を希望する人はこれまでどおり受けられますから、助け合いを希望する人にこれを提供できるようにするのを妨げる理由にはなりません。

そういう主張は、希望している高齢者の幸せを根拠もなく奪うものだということがご理解ください。

(参考図) 介護保険の体系

要介護者	要介護者5	（市町村主催） ① 介護給付	（民間団体主催） ④ 助け合い
	要介護者4		
	要介護者3		
	要介護者2		
	要介護者1		
	（軽度者）		
要支援者等	要支援者 2 1	（市町村主催） ② 介護予防 サービス	（民間団体主催） ③ 助け合い
	虚弱者 （チェックリスト該当者）		

【緊急提言のための注記】

②と③が「総合事業」です（②の中の看護、リハビリ等は、総合事業外の給付で提供されます）。

今回の改正は、③の助け合いを④でもやれるようにしたものです。

ただ、厚労省はその範囲を限定して、要支援者等の段階から助け合いを受けている要介護者しか④を受けられないことにしたので、緊急提言では厚労省に対し、そのような限定をせず、希望する要介護者全員が受けられるようにしてほしいと要望しています。

※右ページにご紹介した提言文は、問題のポイントをまとめた簡易版です。国に提出した「緊急提言」及び「経緯と緊急に要望する理由」全文は、当財団のホームページでご紹介しています。ご賛同をいただける場合は、ホームページにある「賛同申込」よりお名前等をお知らせください（または、本誌同封の投稿ハガキに「緊急提言に賛同」の旨、お名前等と併せてご記載の上、ご投函ください）。賛同者のお名前・肩書等は、ホームページ上でご紹介させていただきます。緊急提言の内容・ご賛同申込みはこちら↓

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/proposal/>

新連載

移住

悪くないですよ

第1回



寒いけれど あたたかい、 枝幸町の 応援団長

鷺見 道子さん（北海道枝幸町）



皆さんは、新しい土地で暮らしてみたいと考えたことはありますか？ 昨今、話題の「移住」。そのきっかけも暮らしぶりも人それぞれですが、ただ、共通しているのは、いきがいをもち、自分なりの充実した人生を送りたいという思いではないでしょうか。移住したまちで、地域の人たちと共にいきいきと暮らす方々をご紹介します新シリーズ。第1回は、新潟からオホーツク海に面した枝幸町^{えさしちょう}に移り住んだ鷺見道子さんです。「本州の人間から見た枝幸町の素晴らしさを、より町の皆さんに知っていただき、お世話になった方々と町に恩返ししたい」。笑顔が実に魅力的なお山のわしみさん。こと鷺見さんは、移住先の町を愛し、人々の中でさまざまなふれあいをつくり出していました。

（編集部／本文・新地域支援事業担当リーダー 目崎 康浩）

新潟での多感な子ども時代 東京での青春時代

鷲見さんは新潟で生まれ育ち、友だちと一緒に跳んだり走ったり、真っ黒になるまで外で遊ぶのが大好きな子だったという。



鷲見さん3歳の頃

裏山に出かけては、木々の枝葉を揺らす風の音に耳を澄ます少女時代を送った。感受性豊かな鷲見さんは、思春期に友だちにすすめられて人前で歌う機会があり、それが喜びになっていった。プロの目に留まったこともあったが、大好きな音楽を仕事にしたいと辞退した。

学校を卒業すると2年間、東京の新宿や池袋で仕事をした。飲食店での接客や調理に従事しながら、好きなアーティストのライブにもよく出かけたそうだ。「いろいろな国の人と知り合い、つたない英語で話して一緒に食べたり飲んだり歌い踊ったりするうちに、人種も肌の色も気にならなく

なりました。同時に語学に目覚め、アメリカのラジオを寝るまで聴いていましたね。英語さえできれば世界のあちこちに友だちができる、という期待で胸を膨らませていました」

東京での生活は刺激的ではあったが、「自由人」として、仕事でマニュアルに沿った接客をすることなどに息苦しさがあった。2年ほど経った頃、新潟にUターン。英語をじっくり学ぶつもりだったが、当時、新潟で人気だったロシア語を習得した。その成果を生かし、ロシアにホームステイ等で3回、オースト

リア、アメリカ、韓国にも渡航。22歳で北海道函館市にあるロシア極東連邦総合大学函館で2年間勉強した後、紋別にあるカニを輸入する会社



20歳、ロシアにてホストファミリーと
(左が鷲見さん)



展望閣から見下ろす枝幸町。美しい町と海が広がる

○ 移住、子育て、出会い： そして展望閣の管理人に

枝幸町は、人口こそ8000人ほどだが、面積は東京都の2分の1という広さで、町の8割を森

にロシア語通訳として就職した。現在のご主人と出会われたのが、ちょうどその頃だ。約5年後に結婚、ご主人の仕事の関係で枝幸町に移り住むことになったのは、最初の娘さんが生まれた直後。新しい環境で生活するのは慣れていたし、夫と自分だけなら何とかなるが、知り合いもない町で初めての子育てをしなければならぬことに、さすがの驚見さんも不安でいっぱいになった。しかし、「初めて三笠山に登って、娘を抱っこしながら展望閣から枝幸町の景色を見たときに、この町で生きていけるノと思ったんです。おおらかで楽観的な驚見さんらしい心境の変化だ。

林が占めている。夏と冬の気温差は最大70度に達し、冬に流氷が接岸すれば海岸から「流氷の天使」クリオネを見ることが出来る。カニ籠漁日本一の毛ガニのほか、ホタテ、秋鮭なども「オホーツク枝幸ブランド」として全国に流通している。漁業のほかにも、酪農を中心とする農業と、森林の有効活用を目指す林業の第1次産業が盛んだ。

町のシンボルである標高172メートルの三笠山に、町営の三笠山展望閣はある。2階の展望室から一望する枝幸町と、その先に続くオホーツク海は絶景で、驚見さんは、子どもたちが幼く育児に追われていた頃、よくこの展望閣を訪れた。

「枝幸に住み始めた頃は、夫の仕事が朝早く夜遅かったので、子育ては私一人。初めての土地で知り合いがおらず、子どもの預け先もなく、24時間の育児はとても大変でした。でも、ここに来ると日々のモヤモヤを忘れ、疲れも癒され、カフェでコーヒーを飲みながら子どもたちとのんびりできて、大好きな場所でした。人見知りで食が細かつ

たうちの子も、ここでは元気によく遊んでくれました。そして、当時の展望閣の管理人さんに、子育ての難しさや自分自身の悩みを聞いてもらって、いたことが大きな救いになっていました」

転機が訪れたのは、移住して3年ほど経った2005年4月。当時の管理人さんが辞めることになり、そのご本人からの後押しもあって、自分たちを受け入れてくれた枝幸町と展望閣に感謝していたことから、管理人募集に応募、採用となった。「こんなに素敵な場所をもっと町の皆さんに知ってほしいし、交流の場にもしていきたいなと思います」

○ もっともっと、みんなが集まる場所に

枝幸町は、冬には氷点下30度になることもあり、展望閣は5月から10月の間だけの営業だ。驚見さんはカフェコーナーを切り盛りするほか、展望室のスペースを利用して、各種イベントを開催している。

「管理人になって今年で15年目ですが、3年目からハンドメイド限定のフリーマーケットを、子育て中のママさんたちと始めました。13年間で21回開催しています。最初は少人数でしたが、手先が器用な方、手芸が趣味の方など、人が集まることで渦ができて、出会いが生まれる感じで、人と人とのつながりが広がっていきました。親子で楽しめるイベントであると同時に、ママさんたちが、子どものママとしてではなく、一人の人間として活動できる貴重な機会になっていると思います」

フリーマーケット



にぎわいを見せるフリーマーケットの様子

音楽イベントの様子



は土日の2日間で、最近では300人ほどが集まるイベントに成長した。町内だけでなく、訪れたリSNSをフォローしてくれたりする他市町村のお母さんたちも仲間になっているという。

そして、もともと音楽が大好きな鷺見さんだが、枝幸町に来た頃、町で音楽イベントはほとんどなかった。そこで、フリマ開始と同年に展望閣での

音楽イベントを自ら企画することにした。

「札幌や函館のように華やかではありませんが、身近なあたたかい夜景がここにはあります。町の人たちに展望閣からの夜景と音楽を何とかして届けたい！と思ったんです」

イベントでは、ギター演奏やアフリカ出身の人たちによるアフリカン・パーカ

ッションなどが披露される。鷺見さん持ち前の国際感覚と音楽好きが、町の人たちに新しい楽しみをもたらしたのだ。今ではあちこちから、演奏したいという申し出が来る。「展望閣と素晴らしい夜景が人を呼び、出会いやふれあいの機会をくれた」と鷺見さん。何より自分が楽しみなからやっていること、そして「頑張つて」と応援してくれる町の人たちのおかげで続けられている、とあふれる笑顔で話す。その影響もあってか、今では高校3年生と1年生に成長した娘さんたちも楽器に親しんでいるようだ。

「子どもたちには、自然や人情味あふれる人たちの中でのびのびと育ったこの町を、誇りに思つて世の中に出てほしいと願っています」

※フリーマーケットと音楽イベントは、現在、新型コロナウイルスの影響で休止中。

人間らしくいられる 寒いけれど、あたたかいこの町

東京や新潟での生活も経験している鷺見さんに、

枝幸町での生活について聞いた。

「ここでは無理してかっこつける必要がないし、おおらかで楽しい人が多いですね。個性的な方もいて、それは“人間が人間らしく”生活しているからではないかと思っています。食べ物も、魚介類はこの上なく新鮮で安い。そしておいしい！だって、枝幸の前浜でその日の朝に獲れたものですからね。物価もそれほど高い感じはしませんね」

もう一つ、枝幸町の大きな魅力は、夏が涼しいこと。「今の時代、夏に『寒い』なんて言えるのは、日本中探してもここ宗谷地方しかないのでは（笑）。真夏でも好きなので外に出て、スポーツもアウトドアもできます。猛暑のせいで夏を謳歌できないのはもったいないし、日中30度を超える真夏日もあります。夜には気温が下がるのでよく眠れますから、病気がちな方にも良い気候ではないでしょうか。私自身、この町で本当に体調良くなるまで、ありがたく思っています」

現在、鷺見さんは町の社会教育委員も務めています。

る。最後に、これからについて聞いた。

「これからの世の中は、AIなどもどんどん導入されていきますよね。人の生きる意味といったことを、どこに見いだせばいいのかわからなくなるのでは、と思うんです。だから、枝幸町はこれからもずっと自然や人のあたたかさがある姿のまま、でいてほしい。個人にできることは限られています。お山（展望閣）で人と人をつないでいく。」

ここであなたがなコミュニケーションをつくっていきける。皆さんと顔見知りになって、気兼ねなく常連になつていただく。そして、子どもからお年寄りまでが集う居場所になっている――、これからさらにそんな場所にしていきたいですね。それから、枝幸が夏の間だけでも、猛暑で大変な思いをされている本州の方々の癒しの町になれば、素敵だなあ、と思っています」

「鷺見さんは枝幸町の顔ですね」と聞くと、「いや、山のおばちゃんですよ。自称『枝幸応援団長（笑）』と楽しそうに答えてくれた。

と広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



コロナ禍でも開催中！

《愉快で楽しい多世代交流》の まちなかりビング

東灘こどもカフェ（兵庫県神戸市）

長引くコロナ禍は、人々のつながりを分断し、地域の居場所の活動にもさまざまな影響を与えています。そんな中にあっても、神戸市の「東灘こどもカフェ」は10周年を迎え、いつときも居場所を閉めることなく、できる工夫で活動を創出中。「愉快で楽しい多世代交流」がモットーの活気あふれる現場や参加メンバーの思いをリポートします。

（取材・文／城石 真紀子）

1年363日、いつでもあいてて
誰でも参加OK

兵庫県神戸市の最東部に位置する東灘区は、人口約21万人、住民のおよそ7割がマンションなどの集合住宅に暮らす多子高齢化のまちだ。この東灘区の真ん中、JR神戸線・摂津本山駅から徒歩10分ほどの人通りの多い商店街近くに、空き事務所を借用して東灘こどもカフェが運営する居場所「木洩童」がある。

「『こもれど』というのは、英語の『comorade（仲間・同志）』から取りましたが、同時に日溜まりの中で人々が童子のように微笑む仲間づくりの場にしたという思いが込められています」と話してくれたのは、代



商店街の一角にある
「木洩童」



笑顔が素敵な
代表の中村さん

表を務める中村保佑さん（76歳）。朝9時の開店と同時に、バザー用品の店頭出しが始まる。日用品から衣類、古本、食器、電化製品までが所狭しと並び、まるでリサイクルショップのよう。これは会員からの提案で、会員や近所の人たちから家にある不用品を寄付してもらい、店頭販売をしているのだそう。安いもので10円から高いもので1

「キヤッチセールズが上手なんです」

と笑う。

「売り上げは微々たるものですが、ちりも積もればで年間30万円程度の収入に。原価がかかってないので居場所運営の貴重な財源になっていて、さらにはつながりのきつかけとしても役立っています」

バザー用品を買う人だけでなく、持

000円くらいまで、およそ市価の10分の1。しかもその場で値引きして販売されるので、「ちよつとええもんないか」と立ち止まる人も多く、今並べたばかりの品が買われていく。「粉ミルク缶にお尻拭きのおまけを付けて500円ね」。買い物客にすかさず

ってくる人、買い物途中にお茶を飲みに立ち寄ったり、トイレを借りにくる人など、コロナ禍にも関わらずいろんな人がちよこちよ顔出しして、実にぎやか。「近くの店で買い物をしたいんだけど、なんか袋ない？」との飛び込みにも、「このレジ袋でいいかなはい、うちは無料だよ」と気さくに差し出す。

「人生相談から簡単な道案内まで、そのとき集まっている人で、できることは何でもします。『来る人は拒まず』が基本姿勢です」

ここでは、毎日の店頭バザー、日替わりのランチ、みんなが先生になれる各種講座、子育てサロン、子どもたち対象のイベントや季節行事、その他数えきれないほどの取り組みが行われていて、定期・不定期を合わせるとイベントや講座の数は年間200以上。正月の1日と2日を除く1年363日間

催という年中無休状態である。年間約1万人集う人たちの年齢層も0歳から90代までと幅広く、いつでも誰でもが通える開かれた居場所であることが大きな特徴だ。

子どもたちへの食育から 幅広い世代の交流拠点へ

東灘こどもカフェの活動は、2010年秋から始まり、翌11年4月に会員11名で正式スタートした。そのきっかけについて中村さんは、「自分のための居場所が欲しかったから」と振り返る。

「20年間東京で単身赴任し、定年で退職して神戸に帰ってきたら、浦島太郎みたいに周りに誰も知り合いがおらず、おまけに家には見知らぬ犬がいて、僕の部屋でいつも粗相をする（笑）。仕事もなければ、行き場も居場所もない。待っていたのはそんな不安定な現実で



講座やイベントなど多彩な企画を実施
(上・クリスマス会、下・やかんカーリング)

した。それで、まずは顔見知りをつくるために、地域で開催している講座やイベントに片っ端から参加。それらの場でできた仲間たちと立ち上げたのが、東灘こどもカフェなんです」

その出発点は子どもたちへの食育から。「子どもたちが食べ物に関心を持ち、食べ物を大事にして食事を楽しんでほしい」と、フリースペースを借り

と、世代や性別を問わずに巻き込んで、楽しみも食事だけでなく趣味、遊び、勉強と、みんなで楽しみを分かち合う居場所へと成長、現在の会員数は830人に上る。

「会員が増えればいろんな要望も増えるわけですが、それを全部断らずに引き受けているうちにどんどん活動が広がっていききました」

甲南大学のボランティアサークルの学生も会員として活動中。あふれんばかりのエネルギーとアイデアはあってもそれを発揮する場がなかった彼らは、あるとき木洩童にひよっこりやってきてその現状を訴えた。「どんどん好きなことをやってください」と言われて仲間に加わり、子ども塾や子ども食堂などを次々と開催。子どもたちと楽しく遊ぶ日曜イベントも毎月実施している。



甲南大学の学生と子どもたちが
思いっきり外遊び！

「僕らが子どもたちと外遊びをしたら、途中でひっくり返って病院送りが関の山。だけど、彼らはすべり台は一緒にすべるし、鬼ごっこはするし、汗びっしょりになって遊んでくれるから、子どもはみんな大喜びですよ」
ぶらりと来て参加した人が、自分から積極的に関わるまでの時間が極めて短く、今日の参加者が次に講師の先生になったりシエフになるということも、ここでは当たり前。発足以来、日常のちょっとした困りごとを支援してきた「何でもお手伝いチーム」は、15年7月から「東灘なんでもお手伝いセンター」というプロジェクトに発展。16年1月からは阪神淡路大震災時の炊き出しをきっかけに地域の高齢者に手作り昼食を届けるボランティア活動をしてきた「あたふたクック



あたふたクッキングの皆さん。
お弁当はご飯と4菜の健康食

キング」の事業を引き継ぎ、すぐ近くに調理場となる新たな拠点を設けて月曜から金曜日まで毎日60～90食の配食サービスも行っている。

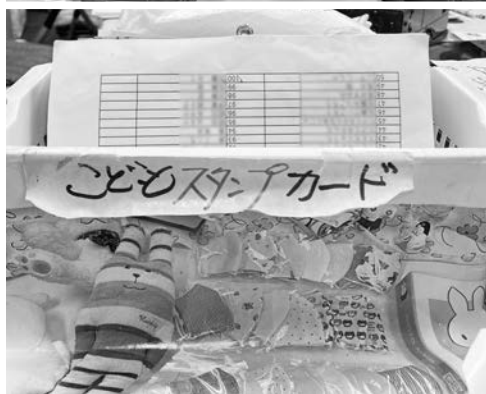
大好評の「小さなボランティアで コロナを乗りきろう！」作戦

コロナ禍においても、その活動は途切れることなく継続中。4月に緊急事態宣言が出されたとき、神戸市内の8割以上の居場所は活動を休止したが、

本洩童は変わらずに朝から夕方までオープン。「いつ来てもあいている」みんなの安らぎの場であり続ける選択をした。

「配食サービスの活動も、一時はお休みしようか迷ったのですが、『お昼ご飯は毎日食べるものだから続けてほしい』との要望があり、食事作りの基本であるマスク、手洗い、消毒はもちろんのこと、おかずは火を通したものを提供するなど、感染予防を徹底して継続しました。結果的にはこれまでに1人の感染者を出すこともなく、担い手の皆さんも『こんなときでも毎週1回行くところがあってよかった』と。外には食べに行けないけれど、調理後にみんなでお弁当を食べて、おしゃべりをする時間が持てたことで元氣になりました」と話してくれたのは、あたふたクッキング代表の川崎善子さん。

また、人が集まるイベントや各種講



子どもたちに大人気の
「コロナを乗りきろう！」作戦

座の多くは休止となったものの、コロナ禍でもできることを、と新たな取り組みにも着手。地域の宝である子ども支援活動として、100円のおにぎり弁当の提供と、お菓子・食材の無料配布を行う「小さなボランティアでコロナを乗りきろう！」作戦を開始したのである。

「スタンプカードを作成し、家のお手

伝いや草木の水やり、商店街のごみ拾い、ここで飼っている金魚の餌やりなど、小さなボランティアをするとスタンプとお菓子が1つゲットできる。スタンプが10個たまると、さらにくじでハズレなしの景品と、よい子で賞」という表彰状を進呈しています。3月から始めてすでにカード270人分を発行。もう50回以上来ている子もいま

す」と中村さん。

取材中も「お菓子もらいに来たよー」という元気な声とともに2組の親子がやって来て、子どもたちは慣れた様子でカード入れから自分のスタンブカードを探し出す。

「コロナの影響で子どもたちは家に閉じこもりがち。そんなときに例えば、ボランティアの大学生のお兄さんやお姉さんと一緒にまちに繰り出して、楽しくごみ拾いをする。商店街では人の目もありますから、周りの大人たちからは『えらいねえ』とほめられてちょっとした優越感も得られ、地域の人たちと自然に交流できて、子どもたちの健全な成長がサポートできる。発案者は子育てサロンに來ているお母さんなんです。さすがに現役の母親は目のつけどころが違います」

この企画は、CS神戸（認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター

神戸）の「乗りきろう！コロナ基金」や当財団の「地域助け合い基金」からの助成を活用したほか、さまざまな団体の協力を得て現在も絶賛継続中だ。

地域の居場所、出場所として 地域家族のような関係を築きたい

「お年寄りには感染を心配して足が遠のき気味ですが、子どもに関しては逆にぎやかになつたくらい。国のGo To Eatキャンペーン事業が始まったのをきっかけに、自分の得意料理を披露するランチ会も復活し始めました」

事前予約でその場で食べてもいいし、持ち帰りもOK。近々、煮込みハンバーグを披露する予定の前田洋子さんは元保育士。次の仕事に就くまでの1年間、ボランティアをして過ごそうと今年3月に木洩童に見学にきたら、「泥沼のように引き込まれた」と笑う。学

童保育指導員を卒業したばかりの寺田安江さんは、ここで店番の手伝いをしながら第2の人生について模索中。大工の吉川彬^{しげ}さんはバザー用品を買ったのがきっかけで仲間になり、本職を生かしながらもお手伝いセンターで活躍中。設立メンバーの1人で、あたふたクッキング唯一の男性スタッフ兼「二水会」（アルコール付き懇親会）を主宰する堀尾始さんは、「休止中の二水会を安全に復活させたい」と意気込む。

当日集まってくださった皆さんも含めて、参加するメンバーの活動目的はそれぞれだが、共通するのはこの居場所を愛し、お互いを認め、そしてたとえどんな状況下でも楽しく活動している、という前向きな姿勢だ。

「僕是这样いう活動は、恩送りだと思っんです。自分が1つ何かやることによって、周囲の人に伝搬して地域の

絆がつくられていく。その素晴らしいさが子どもたちにも伝わればいいなと思っ
ています」という中村さんは、最後
にこう締めくくった。

「東灘こどもカフェも皆さんのおかげ
でこの秋に活動10周年を迎えました。

その間、参加メンバーも企画もど
んどん変わって、この先どうなっ
ていくかはわかりません。でも、
その変化さえも楽しみながら多く
の方の居場所、地域の課題をお手
伝いする「出場所」として、さら
には地域家族のような多世代交流
のゆるやかで、温かな関係を築い
ていきたいと思っています。これ
からもみんなで楽しみますよ」

新型コロナウイルスは、人々のつながり
を分断した。しかし誰も経験した
ことのないことだからこそ、試行
錯誤を繰り返しながら正しく恐れ、
自分たちに最適なものを生み出し

ていくチャンスにもなり得
る。コロナ禍でも工夫をし
ながら、愉快で楽しい活動
を続ける東灘こどもカフェ
の姿は、その希望の光とし
てまぶしく輝いて見えた。



東灘こどもカフェ主要メンバーの皆さん

東灘こどもカフェ

食・文化などをテーマに、子どもと「昔の子ども」との多世代交流を図り、
夢・目標・生活をお互いが支援する目的のボランティアグループ。活動拠
点は「木洩童」と「あたふた甲南」の2か所。主な活動内容は、①多世代交流
居場所「木洩童」の運営、②一般社団法人「東灘なんでもお手伝いセンター」
による生活のお困りごとサポート（有償ボランティア）、③「あたふたクッ
キング」による高齢者への昼食配食活動（月～金曜日／1食500円・配達料
込）。誰でも入れる会員制で年会費1000円（子ども会員500円）。会員特
典として、参加割引がある、運営に参加できる、講師にもなれる。運営原則
は、①経理情報の全面公開・共有、②できる範囲で無理しない、③ファミリ
ーでボランティアな関係、の3点。

●連絡先／〒658-0084 兵庫県神戸市東灘区甲南町3-7-14 城野ビル1F
電話 090-7701-6393
ホームページ <http://foryou.main.jp/>

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆さまからのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、一言応援コメントなどをご記入ください。※手数料不要の振込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

23ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、40ページおよび当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

＜寄付・助成のお問い合わせ＞
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、全国の助け合い活動を支援している「地域助け合い基金」。助成のお申し込みを多数いただき、速やかに実行しています。今月号も、3団体の活動と助成後の報告をご紹介します。なお、活動報告は当財団ホームページに随時アップしておりますので、ぜひご覧ください。

福島県郡山市

オンライン学習用のパソコンを購入 不利な立場の子どもたちを支援

NPO法人ウェブストーリー

助成金額 15万円

ウェブストーリーは、コロナ禍での学校のオンライン授業に必要な端末を準備できるかどうかが家庭環境の差に出ており、一人親や貧困家庭ほど子どもがしわ寄せを受け

ている現状に対応。本基金の助成金で購入したパソコン2台を貸し出し、学習面で不利な立場にある子どもたちへの支援を実施しました。

「まだまだコロナ禍にあり、日々の生活で子どもたちの学習まで目配りする余裕がないことが予想され



ることから、活動を周知するさまざまな方法を考えながら継続的に活動したい」「政府支援はもちろんではあるが、細やかな目配りなど地域住民の助け合いによる継続支援が必要だと感じた」との報告を下すると同時に、時間を忘れてオンライン学習に集中する小学生たちの写真（前ページ下）も送っていただきました。

滋賀県米原市

お弁当の配達で、しんどさを抱える コロナ禍の若者を支援

NPO法人わか

助成金額 7万8000万円

NPO法人わかでは、これまでの活動の中で出会って関係をつないできた若者と、食を通じた関わりをつないで生活支援を行うのを目的に、本基金の助成金で、コロナ禍でアルバイトができなくなり収入が途絶えた大学生や、普段から関わっている、生活にしんどさを抱えた若者にお弁当を毎日届ける宅食活動を実施しました。食養生に詳しい

スタッフが調理したお弁当により、栄養のある食事を1日に1回は取れることになりました。

運営するシェルターハウスに入居している大学生や、精神的に不安定で仕事ができなくなっている若者に平日6日お弁当を配達し続け、若者たちと少し話をすることで体調や精神状態、もしくはお弁当を受け取れないほど体調が悪いことなどがわかったそうです。その結果、配達期間中に一時期働くことができた大学生もあり、栄養を考えた食事を取ることで生活リズムを崩しづらい状況をつくることもできました。お弁当の配達は、これから必要としてくれる限り行っていく、ということです。

埼玉県三芳町

子どもたちがお年寄りを訪問 コロナでもつながりを絶やさない工夫

ボランティアグループ北3食堂

助成金額 10万円

北3食堂は昨年11月に、将来的に世代間で助け合う地域

づくりを目指して子どもも大人も参加できる「こども・大人食堂」を始めましたが、コロナ禍で活動休止となりました。そこで、子どもたちと保護者の負担軽減のために、夏休みに昼食配布を実施しました（本誌10月号6ページ）。

一方で、お年寄りも外に出られず寂しいという声が届いたことから、北3食堂と町の育成会が協力して、お年寄りのいる世帯に子どもたちが訪問することを企画。お年寄りは、回覧板で参加を呼びかけたところ10世帯の申し込みがあり、子どもたちには育成会がSNSで参加を募り、以前



から北3食堂にもよく来ていた子どもたち2名が参加。当日は、夏休みの昼食配布の際に子どもたちに作ってもらったメッセージカードと、お年寄りに「健康でいてください」という気持ちを込めた青汁を持参し、約1時間かけて10世帯を訪問。最初は付き添いの大人の後ろに隠れるようにしていた子どもたちも、数軒まわるうちに緊張がほぐれ、自らカードをお年寄りに手渡して「コロナに負けないで元気でいてください」と声かけもできたそうです。お年寄りも「待ってたよ」と笑顔で応え、用意していた手作りのお手

玉や折り紙作品等を子どもたちにくれたということです。

本基金の助成金はこれらの活動に役立てられました。今後も北3食堂では、築かれてきた世代間のつながりを絶やさることがないように、食事配布やお年寄りへの訪問を継続していく計画です。



「地域助け合い基金」状況のご報告

立ち上げから半年、皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」の状況をご報告いたします。

◎寄付受付額 160件 836万6200円

このほかに当財団より3千万円を供出

◎助成実行額 268件 3503万2350円

(11月16日 当財団ホームページ開示時点)

前月号でご報告しました10月15日以降に6件のご寄付をいただき、40件の助成を速やかに実行いたしました。これまでに助成させていただいた団体・個人の方から、助成金を有効に活用させてもらいました、という報告を続々といただいています。その一部を今月号(P20)でもご紹介していますが、財団ホームページではいた

いた活動報告を全件公開していますので、どうぞご覧ください。

第3波ともいわれる新型コロナウイルスとの闘いはこれからも続きます。困難な状況の今こそ、地域でのつながりがさらに強まることを願ってやみません。助け合いを広げるため、皆様らのご支援、ご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額も一覧できますので、寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…



「死」を想うきっかけとなった

新型コロナウイルスの襲来

尾崎 雄

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（地球規模の拡大）による感染者は約5200万を超え、死者はおおよそ130万に達した。わが国でも感染者は11万人を超え、死者は1800人に達し、冬場を迎えさらに増えることは確実である。新聞やテレビは、こうした統計数字やそれを加工したグラフとその意味を説く専門家らのコメントや解説をくりかえし掲載し、放送する。でも、私たちは、新型コロナウイルスでなくなった人びとの死体を見たことがあるのか。リアルな人の死を見ることなく、おびただしい「コロナ」情報を消費し、それに翻弄されている。不思議なことではないか。そう思案していたら一冊の本が目にとまった。『死体を探せ！ バーチャル・リア

リティ時代の死体』（布施英利著・1993年）。それによると、鎌倉・戦国時代までは「死体は道ばたに転がっていた」が、江戸期から路上の死体が消えた。江戸時代の全国を支配した徳川幕府は徹底した管理社会であり、庶民に見せたくないものは早くかたづけたのである。時代は飛ぶが、太平洋戦争の敗戦後に登場した民主政権は医療のシステム化と社会保障制度を進めた結果、死は病院で処理され、人の死は社会から隠蔽されるようになった。それは経済成長とともに加速、1976年には病院死の数が在宅死を上回り、病院死の割合は80%に達した。ところが、そのぶん国民医療費が増え、国家財政を圧迫して社会保障制度の維持が困難になるため、国は病院死か

ら在宅死へシフトする政策転換に踏み切る。
医療介護総合確保推進法の公布（2014年）である。

おかげで私たちは、心身のギリギリまで要介護高齢者や病人を自宅で支え、家族が限界に達したら病院や介護施設にゆだねて高齢者を「幸せ」に見送ることができるようになった。また、本人と家族が望めば、死の訪れとともに身体が次第に冷え、死体が変わっていく様子を家族が見届けることもできるようになった。私はそのようにして母や義父母を看取ってきたが、それは決して不幸な体験ではなかった。在宅死を支えるスキルとマインドを備えた医師と看護・介護職の助けを受けることができるようになったからである。

69歳以下0・09%、70歳以上5・75%という死亡率は高いか低いかはさておき、マスク着用と手洗いを徹底し、不要不急の「三密」を避ければ「コロナ」はそれほど

恐ろしい感染症ではないだろう。だとすれば「コロナ」禍の意味は何なのか？ ベテラン訪問診療医である小堀嶋一郎氏は語る。「新型コロナウイルス蔓延は在宅療養を行う患者と、それに関わる医療・介護関係者に、社会一般が想像する以上に大きな影響を及ぼしている」（朝日新聞出版刊「一冊の本」10月号）。「コロナ」禍によって病院の入院受け入れ機能が低下した結果、在宅での看取りが増え、「多くの人々が自らの、そして家族の死を考える契機になった」（同）ということである。なくなった患者には申し訳ないが、「未知のウイルス」はそのことを教えてくれた。

黒死病（ペスト）が猖獗（しょうけつ）をきわめた中世のヨーロッパでは死は日常のことだったため、人々は、常に死を直視せよという言葉「メント・モリ」を忘れなかった。2020年は、その古語がよみがえった記念すべき年である。

特別
対談

青写真を描くのは地方自治体 ～地域共生社会への道と難題～

堀田 力



宮本太郎



コロナ禍を乗り越えた後、私たちはどのようにして皆が幸せに暮らせる社会を築いていけばよいのでしょうか。

当財団会長・堀田力が中央大学法学部教授・宮本太郎氏をお招きして、今後の日本における地域共生社会のために、3つの難題について大きな視点から話し合いました。

今後の共生社会づくりに、どうぞご活用ください。

目 次

選ぶ道は地域共生社会

地域共生社会への道筋と大きな課題

難題1 外国人の受け入れと共生

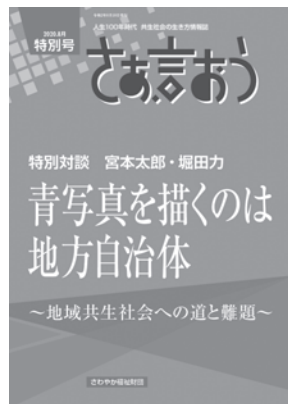
「やる人がいないから受け入れよう」はダメ／「特定技能1号」は家族帯同を／しっかり日本語教育を／遅れている日本の外国人政策／外国人の受け入れ方と文化の衝突／日本社会に馴染む人を受け入れて共生する／共生の社会的なルールづくりが必要

難題2 多様な特色（ダイバーシティ）を持つ地方の共生社会の復活

地方に暮らすには生活の保障が必要／コミュニティへの就労と社会保障／多様な特色を持つ地方の創生／「まち・ひと・しごと創生」／地域共生の青写真を誰が描くか／地方分権への活力が落ちてきている

難題3 AI・ロボットの能力向上と共生社会

AI・ロボットの能力向上で障がい者などの働く場が奪われないか／AIを活用すべき分野と排除すべき分野 一現場の発信が必要／困難を抱える人の能力を補うAIの開発／AIの再分配と公共活動への再分配／人間の幸せ中心の価値観／楽しみに報酬を払う懐の深い社会



新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

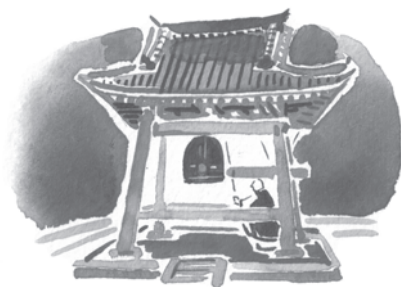
● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





新地域支援事業・

各地の動き

(2020年10月1日～10月31日)

- 全国各地で、推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています



住民に参加を呼びかける

(住民対象のフォーラム、勉強会等)

江東区(東京都)

13日／江東区地域福祉フォーラムが江東区砂町文化センターで開催され、住民など88名が参加、当財団が講演等で協力した。同区では、江東区助け合い活動連絡会、江東区、同区社会福祉協議会の3者が協力して毎年住民フォーラムを行っており、今回はその6回目。

「コロナ禍時代の助け合い活動」をテーマとし、コロナ禍で活動が滞りがちな中、このフォーラムでヒントを得て課題を乗り越えることを狙いとした。

区福祉部長堀田誠氏、区社協事務局長鈴木信幸氏からのあいさつの後、財団の清水肇子理事長が基調講演を行い、ピンチをチャンスに変えること、3密を避けてどう活動するかを考える、話し合いの機会を途切れさせない、情報を正しく得るためにつながり合う、寄付の呼びかけ等の活動の基盤づくりを

行う、等のポイントを話し、動画も交えてコロナ禍での活動事例を紹介した。後半の活動報告では、区内の助け合い活動として、小林孝氏より「コープ南砂での取り組み」、吉野義道氏より「砂町よっちゃん家の活動」、訪問介護現場の事例についてベストケアセクター江東の西郷礼子氏より、それぞれ報告が行われた。

全体総括で、堀田部長は「コロナ禍でも変化を受け入れて柔軟に対応していこう」と呼びかけ、清水理事長はそれぞれの活動についてコメントしたほか、自分たちでできることで動く素晴らしさ、誰もが役割を持つための工夫、またそうしたことができるのが地域である、と話した。閉会あいさつでは、助け合い活動連絡会代表の渡辺恵司氏が「コロナ禍でも諦めずに活動が続いていこう」と力強く締めくくった。

新宮市(和歌山県)

18日／新宮市で地域助け合いフォーラ

(岡野)

ム「みんなでつくろう！ わがらのまち」が開催され、オンラインで当財団が協力。同市役所庁舎大会議室に地域住民70名以上が参加した中、田岡実千年市長のあいさつと熊野家三九郎氏の創作落語に続き、財団の堀田力会長が講演。「みんなで支え合うあたたかいまちをつくるう」をテーマに、「高齢化問題、介護保険料などの財政問題に對してどうするか、その答えは『助け合い』。家族での支え

合いが無理なら、元気高齢者が元気を存分に生かし、お互い様で家族のようないちいち困っている方を助ける助け合い以



外で、少子高齢化、財政難を乗り越えることは困難である。地域の支え合いが地域の絆となり、心豊かな生活へとつながる」と話した。オンライン、マスク着用の中、参加者は画面の堀田会長の話にうなずき、真剣な表情で聞いていた。

その後、居場所と、中学生と地域住民の交流事例が紹介され、それぞれの悩みについてパネルディスカッションで話し合った。今後、このフォーラムで支え合いに関心を見せた住民を中心に勉強会を行い、フォーラムの振り返りと情報交換を行う予定。(目崎智恵子)

生活支援コーディネーター・協議体と連携

鹿嶋市(茨城県)

29日/鹿嶋市で、生活支援体制整備事業に係る勉強会が開催され、当財団が情報提供で協力した。当日は、行政、市社協の他部署のほか、今後、協議体にも参画を予定している公民館の関係

者なども参加した。協議体の取り組みを地域基盤として、地域住民のネットワーク強化や、自発的な助け合い活動の創出に向け、それぞれの役割を果たすことが重要として、全国の事例などを紹介した。(長瀬)

加須市(埼玉県)

5日/加須市北川辺地区第2層協議体(みずわの会)の第2回運営委員会が開催され、当財団もオブザーバーとして参加。みずわの会は発足間もないため、最初の3回程度は全体で集まり情報共有しながら進めていくこととしており、この運営委員会は第2層協議体の全体会議として開催されている。

最初に、前回委員会の振り返りと、みずわの会周知用チラシが共有された。続いて、必要な活動として前回挙がった「気軽に集まれる場所の企画を考える」というテーマについて、具体的にどのように行うかを活発に意見交換し、発表で全体共有された。コロナ禍で開催が難しい状況だが、まずやってみる

ことが大切ではないかとの提案もあり、10月中旬に3圏域で打ち合わせを行い、11月に実施し、12月に運営委員会を開催して全体で情報共有することになった。

新潟市（新潟県）

（岡野）

1日／新潟市第1層生活支援コーディネーター連絡会が開催され、当財団も戦略会議メンバーとしてオンラインで参加した。

新地域支援事業が始まり6年目、地域包括ケア推進モデルハウスを核とした推進状況の確認、各区の行政担当者の異動や生活支援コーディネーターの入れ替わり、推進状況についての現状と課題、を出し合い、あらためて共通理解を確認する必要性があるとの意見が出された。また、コロナ禍で休止中の有償の助け合い「お互いさま新潟」の今後についても、第1層生活支援コーディネーター、河田珠子アドバイザー、望月迪洋政策調整監、市担当者らと議論した。

新潟市は、2014年から全国に先駆けて新地域支援事業に取り組んできた政令市。戦略会議と生活支援コーディネーターらで議論しながら「地域包括ケア推進モデルハウス」「茶の間の学校」「助け合いの学校」などを各区で推進し、助け合う地域を目指してきた。来年1月には関係者を対象に研修開催を予定しており、財団の堀田力会長にも講義の依頼をいただいた。25年までの振り返りのこの時期にこれまでの課題を分析し、基本を再確認し、そして戦略を立て、今後に向けて前に進もうと話し合っている。（鶴山）

金沢市（石川県）

28日／「地域包括支援センターと生活支援コーディネーターの地域づくりに関する意見交換会」が金沢市社協主催で開催され、当財団も協力。この研修は、市社協に配置された生活支援コーディネーターと中学校圏域に配置された地域包括支援センターが活動創出に向けて連携することを目的に、今回初

めて企画されたもの。はじめに財団から「地域包括支援センターと生活支援コーディネーターの協働」をテーマに講義、続いて市内3地区から事例が報告され意見交換を行った。アンケートでは、今後も継続してほしいという声が多く寄せられていた。（高橋）

越前市（福井県）

27日／「越前市地域支え合い推進員研修会」が市主催で開催され、当財団も協力。今回は、新年度で新任の地域支え合い推進員（第2層生活支援コーディネーター）が増えたことから、その役割と具体的な活動について財団から講義を行った。今後は地域支え合い推進員と市が情報を共有し、各地区での活動を効率的に拡充していくためにこの研修会を定期開催していく予定。

（高橋）

大野市（福井県）

31日／協議体の役割を再確認し、今後の活動をより推進していくために「生活支援体制整備事業第1層・第2層協

議体合同研修会」が大野市の主催で開催され、当財団も協力。市内の第1層・第2層協議体構成メンバー、生活支援コーディネーター、市社協など約70名が参加した。

市の取り組みとビジョンを示す行政説明に続き、財団からは、「協議体の役割」を中心とした内容で東京からリモートで講義を行った。続いて第1層生活支援コーディネーター、結の阪谷サポート隊（阪谷地区第2層協議体）、やさしい小山ささえ愛隊（小山地区第2層協議体）からこれまでの活動とこれからの展開について報告があった。今後は、市内全地区での第2層協議体の設置と既存協議体による効果的な活動創出を目指す。

山口市（山口県）

（高橋）

15日／山口市内の第1層・第2層生活支援コーディネーターおよび市担当課を対象に意見交換会を行った。当財団から、生活支援コーディネーターと協議体の役割と全国の活動事例を伝え、

参加者の報告によって各地の現状の課題を共有し、その対応策について協議した。市では今後、できるだけ速やかに第2層協議体の設置のための仕掛けを実践していく予定。

（高橋）

協議体編成のための 研修会・勉強会等に協力

三春町（福島県）

14日／三春町で第2回住民勉強会が開催され、当財団も協力。3密を避け、午前33名、午後46名に分かれて実施した。参加者は各地区ごとのグループとなり、「地域にあったらよいと思う助け合い活動」のうち1つの活動に絞り、内容等を具体的に話し合った。具体的にすることで3回目以降の各地域での話し合いにつなげていく。発表で挙げられた活動は、サロンや集いの場が多かったが、落ち葉の清掃活動による多世代交流と生活支援、買い物支援、ニーズ調査を兼ねた個別訪問見守り、地域での勉強会開催など、さまざまな案

が出された。

最後に、地区ごとに次の話し合いの日程・場所を決めた。今後は地域でさらに話し合いを続け、生活支援コーディネーターや行政もそれを支援し、住民主体で地域に必要な活動の創出を目指す。

（岡野）

妙高市（新潟県）

31日／妙高市妙高地区の第2層選出のための第2回勉強会が行われ、当財団が講師としてリモートで協力。画面越しやアンケートからも参加者がとても熱心であることが感じられた。今回は、生活支援コーディネーターと協議体の役割について理解してもらうことが目的。^{*}ステップ①③の説明に加え、事例としてステップ①秋田県大館市、ステップ②長崎県時津町、ステップ③山形県白鷹町の取り組みを財団から紹介。住民主体で体制をつくり、その後、協議体が生活支援コーディネーターと連携してどのように地域に入り住民の声を聞き、どのように助け合いを創出し



たかについて紹介、質疑応答も行った。アイスブレイクとして行った助け合い体験ゲームも、コロナ禍のため握手をせず、グータッチで助け合いの楽しさを実感している様子だった。

事後アンケートでは「早急な体制づくりが必要だと思う」「地域の方々の意識改革も必要になってくると思う」など、推進したいという意欲を感じる意見もたくさん出された。この段階で「協議体に入る」と記名してくれた人も5名。次回勉強会は11月に開催し、みんなで生活支援コーディネーターと協議体の選出に向けた意見を出し合う予定。
(鶴山)

生活支援コーディネーター 養成研修等に協力

茨城県

7・14・20・28日／茨城県の令和2年度「生活支援体制整備事業研修会」がオンラインで実施された。本企画は当初、集合形式の基礎研修を想定して準

備を進めていたが、コロナの影響を踏まえ、県庁、県社協と協議の結果オンライン形式に切り替えた経緯がある。対象者は変更せず、生活支援コーディネーターを含む行政、社協、地域包括支援センター等の関係者とした。オンラインの研修は試験的な要素も多く、県内44自治体を6ブロックに分け参加者が質問しやすい環境を用意したり、事前に資料を配布し、アンケートを実施して論点を明確にするなど、さまざまな工夫を凝らして実施した。(長瀬)

助け合いの地域づくりのために協力

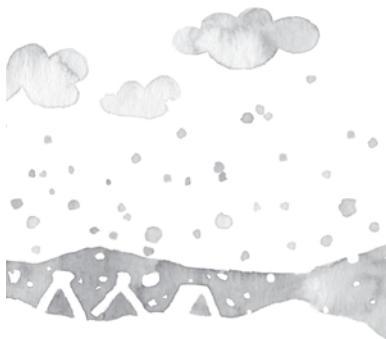
山口県

7・14日／山口県内の老人クラブが地域の関係者と連携して支え合い活動をより推進していくことを目的に、「地域支え合い担い手養成講座」が開催された。山口県老人クラブ連合会(きららシニア山口)主催の本講座は全4回で構成されており、当財団は第1回「今の時代に求められている老人クラ

ブの役割を理解しよう」に協力、10月7日に下松会場、14日に山口会場で講義を行った。

実践報告では、呉市支え合いホームヘルプサービス(広島県)、おたがいさまネットおかもと(神奈川県)が事例を発表、参加者のやる気を引き出していた。第2・3回目ではグループワークも行い、各地での実践に結び付けていく予定。
(高橋)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、
鶴山芳子、長瀬純治、目崎智恵子)

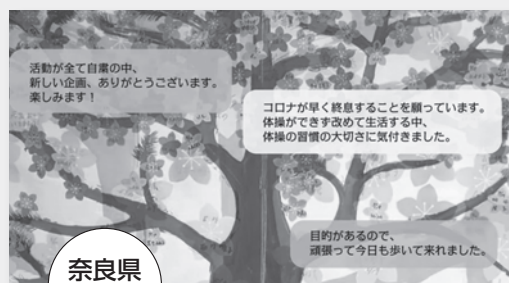


『NEXT ～心と心をつなぐ工夫と取り組み～』

好評配信中！

コロナ禍に負けない日本各地の素晴らしい活動を紹介している、動画「NEXT～心と心をつなぐ工夫と取り組み」。これまでに奈良県生駒市、静岡県袋井市、大阪府門真市を配信し、休止した活動の再開や、新たなふれあい・助け合いのヒントとして大変で好評いただいています。

12月上旬に第4弾・新潟市「実家の茶の間・紫竹」が完成するなど、NEXTは今後も順次リリース予定です。どうぞご期待ください！



奈良県
生駒市

静岡県
袋井市



大阪府
門真市



動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

厚生労働省の特設サイト「地域がいきいき 集まろう！通いの場」からもご覧いただけます。

下記アドレスのトップページから「交流」をクリックしてください。

<https://kayoinoba.mhlw.go.jp/>

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2020年10月1日～10月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(60件)

(都道府県別50音順)

宮城県	菅野 善男	遠藤 英嗣
荒川 陽子	櫻井 勇	大橋 哲夫
須藤 わか	佐藤 実以子	鏡 英仁
千葉 雅俊	高橋 昭夫	神原 正子
福島県	仲井 謙介	神部 亜季
緑川 宏子	千葉 崇	仙崎 礼次郎
茨城県	青木 敏郎	高野 利雄
林 修	伊藤 幹夫	竹下 知道
林 美代子	成瀬 えみ子	乃田 倫枝
栃木県	平峰 紀孝	藤川 宏
大島 裕子	星野 征朗	藤田 庄子
埼玉県	東京 都	増田 喜三郎
海老原 邦延	秋元 紀子	本谷 喜美子
大山 真人	石川 正三	吉原 弘子

さわやかパートナー法人(6件)

(50音順)

公益財団法人生命保険文化センター	坂田 豊人	海来 美鶴
一般社団法人全国信用金庫協会	杉山 久美子	神谷 賢蔵
新潟県労働金庫	大久保 寧緒	初田 隆史
パラマウントベッドホールディングス株式会社	登 輝夫	大阪府
社会福祉法人矢祭町社会福祉協議会	藤井 衛	平山 芳弘
ロート製薬株式会社	松岡 紀雄	山口県
	京都府	福森 宏昌

一般ご寄付(3件)

(50音順)

伊藤 操代 (3千円)	堀本 唯志	岡本 えり子
高橋 愛子 (2万円)	山田 淑子	橋下 京子
吉野 義道 (5千円)	徳島県	橋田 加代
	山本 博子	水島 孝司
	愛媛県	長崎県
	永易 宏朗	坂本 正樹
	福岡県	鹿児島県



地域助け合い基金ご寄付（8件）

（ご寄付日付順）

樋口 恵子（1万円）
大前 研一（10万円）
田中 茂利（2万円）
岩瀬 美子（1万円）
伊藤 操代（1万2000円）
清水 勇男（10万円）
匿名希望（2万5000円）
城石 真紀子（10万円）

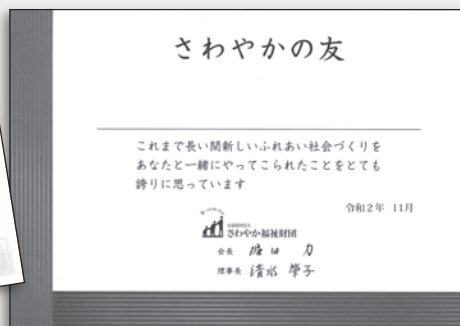


ご支援をいつもありがとうございます

今年もさわやかパートナーに お贈りしました

さわやかパートナーとして20年間、ご支援くださいました皆様に、心ばかりですが永年のご支援に対する感謝状をお贈りさせていただきました。

今後も、新しいふれあい社会づくりを一丸となつて進めてまいります。どうぞ引き続き活動をお見守りくださいますよう、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



NEWS

& にゅーす



助け合いの原点を失わずに、さらにしっかりと
広げていこう

さわやかインストラクター
オンライン会議開催

去る10月12日と16日にさわやかインストラクター会議を初めてオンラインで開催し55名が参加されました。コロナ禍となり、ますます誰にでも助け合い活動の必要性が求められる中、当財団の取り組みも共生社会の推進に向け

て動き出しています。開催1週間前に財団の取り組みについて動画での情報提供を行いました。堀田力会長や清水肇子理事長より、「地域助け合い基金」の立ち上げと状況報告、共生社会に向けての財団の取り組み、介護保険制度改正による、特に要介護者問題など助け合い推進に関係する点についての考え方や情報提供を配信し、事前に質問を受け、オンライン会議に臨みました。全国のさわやかインストラクターが一堂に会したのは今年2月末以来。7か月ぶりの再会に皆さんの表情は嬉しそうで、オンラインで声をかけ合う姿も見られました。

会議は、冒頭に清水理事長からあいさつと趣旨説明があり、その後、堀田会長の進行で2つのテーマ、①地域助け合い基金と地域共生プロジェクト、②生活支援助け合いのリードの仕方、について意見交換。その後、オンライン

ン上でのグループワークで議論し、全体発表で多様な情報や意見を共有。全体を受けて堀田会長がまとめのコメントをするというプログラムとしました。

①のテーマでは今後、

各市区町村単位で地域助け合い基金を立ち上げて共生社会を実現するため、それぞれの県や市区町村における基金の情報を出し合い、どう仕掛けていくかを議論しました。「各地の基金を生



財団会議室でオンライン会議を開催



さわやかインストラクターの皆さんも
久しぶりにオンラインで勢ぞろい

かして助け合いを応援する基金になる
よう働きかけていこう」「県レベルで
基金を立ち上げ活動している。連携し
ていきたい」という積極的な意見もあ
りました。

また、②のテーマでは冒頭に「要介
護者の生活支援を助け合いで行うこと
ができるか」とたずねると、ほぼ全員
が手を挙げる場面もありました。助け

合いを実践し
てきたさわや
かインストラ
クターの経験
に基づく反応
です。

「『助け合い
で』という人
については、
ぜひ皆でやる

んだと。本人の力を生かす点では、む
しろ給付より優れているということ
をぜひ強力に主張して、市区町村が
実施するように頑張りたい。ご意見や
お感じになる点があればうかがいた
い」との堀田会長の進行により、「住
み慣れたところで尊厳をもって住み続
けられることを目的とした以上、なる
べく早く助け合いでつながり関係づ
くりが大事」「プロと組みながら、プ
ロがやれない助け合いの特徴を理解し



「要介護者の生活支援を助け合いで」と力
説する堀田会長



財団職員は“密”を避け、事務所
内各所からグループワークに参加

てもらうことが大切」「家
の中に入っている生活支援の

研修も大切」など、長年助け合いを実
践し継続しているからこそ多様な知
恵や意見を共有した会議となりました。
多くの地域でも人口減少が進み、こ
れまであった地域のつながりや家族機
能が弱まる中、地域でのつながりや助
け合いの必要性はますます高まってい
ます。その実感を持つさわやかインス
トラクターや生活支援コーディネータ
ーと連携し、各地域に必要な働きかけ
を推進していきます。（鶴山 芳子）

さわやか活動日記(抄)

〈2020年10月1日～10月31日〉



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

「広がれボランティアの輪」 連絡会議のシンポジウムに参加

【10月4日】

当財団も幹事団体の1つになっている「広がれボランティアの輪」連絡会議は、1994年にすべての人が「いつでも、どこでも、誰でも、楽しく」ボランティア活動に参加できる環境・気運づくり

を目的に関係団体により結成され、2019年に25周年を迎えた。本来であれば、記念シンポジウムは昨年度開催する予定だったが、異常気象により多発した災害支援のため、開催が見送られていた。そこにコロナ禍が起こ



り、今回初めてウェブ視聴による開催（一部関係者は会場参加）方式となった。ウェブ参加は約500名。

テーマを「誰ひとり取り残さないためのボランティア・市民活動の挑戦」持続可能な私づくり、社会づくり」とし、記念講演に日本社会事業大学学長の神野直彦氏を迎え、続くシンポジウムには、同連絡会議から協同（協働）の視点として日生協（日本生活協同

組合連合会）、NPO、市民活動推進組織など推進者の視点から大阪ボランティア協会が登壇。さらに企業の社会貢献、働く人々の視点として経団連（日本経済団体連合会）SDGs本部、地域の実践者の視点から東京都千代田区社会福祉協議会が登壇してくれた。

神野氏からは「『危機の時代』のボランティア・市民活動の使命」と題し、危機の時代においてはなおさら未来への明確なビジョンを持たないと危機に耐えられない。「所有(having)欲求」

「豊かさ」から「存在(being)欲求」＝「幸福」へ向け、偏見や排

除を止め、相互に連帯し分かち合っていく社会を創造していく必要性が語られた。

シンポジウムは、同連絡会議副会長の原田正樹氏をコーディネーター、神野氏をコメントーターに上記4名の登壇者からコロナ禍で起こった変化や感じたことを語ってもらい、神野氏から「ボランティアは社会を大きく変える力がある。これからは市民が生活面をつくり上げなくてはならず、参加が重要になる」と力強いまとめをいただいた。（上田）



事務所 だより

●今年度、当初の予定事業がコロナ禍で延期となったりしたが、「地域助け合い基金」など新たな取り組みを始めて、みんなでつながり維持・助け合い推進に頑張っている。そんな中、事務担当スタッフたちで時間を見つけて、事務所内や倉庫内を整理整頓。昔の資料などを見ながら、「こんなことやってたね」「この人、今頃どうしているのかなあ...」「これ残す？ それとも保管庫行き？」など「密」を避けつつ丁寧に確認。少しずつきれいになる事務所。これで、仕事も一段とはかどるかな!?



2020
年度

さわやか福祉財団 全国交流フォーラムについて

2019年度のさわやか福祉財団全国交流フォーラムは、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて残念ながら開催を中止させていただきました。

今年度につきましては、今後の状況を踏まえた上で開催方法等詳細は、1月中頃までに財団ホームページや本誌にてお知らせいたします。

なお、日程等につきましては、次の通り予定しています。

日 時：2021年3月22日（月）

場 所：東京・両国

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

【助成応募のご案内】

1. 期 間 常時受付。基金の範囲内で、配分は随時行います。

2. 対象とする活動

共生社会を推進するための助成として、地域で暮らす人同士の助け合い活動（つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含む）。新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

3. 助成額・回数

助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額。上限15万円。原則として1回。ただし、やむを得ない時は2回。

4. 助成の対象

法人格の有無を問いません。個人による活動も含まれます。

5. 応募方法

当財団ホームページの「助成応募要領」で詳細をご確認のうえ、申込書および必要添付書類をメールまたは郵送にて当財団までご送付ください。

<メール送付先> tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

<郵送先> 〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団 「地域助け合い基金窓口」

6. その他

助成金を活用して行った取り組み内容、活動の効果をご報告ください。

助成応募時の推薦、あるいは、助成を受けた活動の報告ご提出時に、地域の生活支援コーディネーターとの連携をお願いしています。また、助成した活動の報告内容については、当財団のホームページや冊子等で公開させていただきます。

【総合お問い合わせ】 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

電話 (03)5470-7751 FAX (03)5470-7755

メール mail@sawayakazaidan.or.jp

※応募書類の送付先メールアドレスとは異なりますのでご注意ください。

みんなの広場



ます



ステキな言葉、有難うございます

10月号巻頭言「『共感』と『寄り添い』アルフォンス・デーケン氏のお心根に感動いたしました。デーケン様への想いを拝読し、ただただ感動し、思わずペンを走らせております。これほど完璧な文面にお目にかかりましたことも素晴らしいです。さわやか福祉財団としての高き誇りでございます。

ただただ感動
アルフォンス・

デーケン氏

田口 渡美子さん

埼玉県



投稿募集

『さあ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

本誌で取り上げたテーマへのご意見・ご感想、人生100年時代の生き方、ボランティア活動等のエピソードなどをお待ちしています！

* 添付の投稿ハガキや投稿用箋などをどうぞ活用ください。

* 掲載にあたっては、誌面の都合により編集要約させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755 メール: pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい

「スノーマンとサンタさん」



編集後記 ●希望するすべての要介護者に助け合いで生活支援を行うことは、本人のいきがいのためにも欠かすことができません。ご賛同をよろしくお願いいたします（P2～「巻頭言」、P4～緊急提言関連記事）。●新企画「移住、悪くないですよ」がスタート！ いきいきと移住生活を送る方々を紹介していきます。ご感想をお寄せください（P6～）。●「活動の現場」は神戸市の東灘こどもカフェ。みんな巻き込んで楽しく活動しています（P12～）。●来年はコロナ禍が収束しますように。良いお年をお迎えください。

助け合いを
広げよう!



秋山 正子



朝の番組で、ゲスト（看護師で僧侶）が、
コロナの外出自粛で
引きこもり不安へのメンタルケアの話をしていた。
「話すことは放す（離す）こと」
がん相談センターで、ひたすら聞くのも
「放してもよいもの」を話してもらっているのかなど。
妙に納得した一言でした。

●保健師

訪問看護の経験を活かし「暮らしの保健室」で地域の方々のよろず相談に乗っている。
がんと共に歩む人々や家族の相談は、豊洲のマガーズ東京で受けている。

「さあ、さあ」 12月号

通巻328号 2020年12月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子
細馬一紀

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

国に「緊急提言」を行いました

希望するすべての要介護者に 助け合いによる生活支援を！

厚生労働省は、住民主体の活動により広く要介護者の日常生活を支援することができるよう、今年10月に省令を改正しました。これにより、来年4月から要介護者が助け合いによる生活支援を選択できる仕組みになりましたが、ただし、「要支援の段階からの継続的な利用であること」が要件とされました。この改正に対しては、「要介護者への介護給付をはずす布石ではないか」といった誤った認識で一部に反対意見が出ており、改正措置自体を採用しないよう働きかける動きも見受けられます。

さわやか福祉財団は、要介護の状態になっても、誰もがお互いさまの助け合いでつながりながら、地域でいきがいを持って暮らせる仕組みをこれまで提言し、その取り組みを全国で支援してきました。

(詳細は、本誌P2～P5をどうぞご参照ください)

**これから、全国の自治体において
要介護者の希望を叶えるための正しい政策が実施されるよう、
皆様のご賛同をぜひともお願いいたします。**

**さわやか福祉財団のホームページに
ご賛同申し込みフォームをご用意しています。**

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/proposal/proposal-form/>